梅美婦祢 二編 亀 下 亀

へ 13
2901
6

門 へ13
號 2901
卷 6

昭和九年
七月五日
購求

春色梅美婦禰巻之六

梅園英對の拾遺

江戸　爲永春水著

第十一回

神社佛閣繁華の名所多き中に例も駕籠の来ぬ
観音大士の霊場ゆゑ名高き美人の女客多く
上方に客を招く程よき年頃の女も頃ぐるまに
女ちゝ三平自慢の女ゆゑ夫お義お利益あり老女の
お美稲と呼ばせ　矢丁天色の中店情の奥山要支

境内へ筆に尽せぬ壮観なり 鎌倉へ西谷東谷傍つ
おくるる茶屋見世の衆 喜ろこへ家とらくる門先みて立ふり
合ふ三四人行まも冨借の高遠と見ゆる風俗なりその
名を理まきぞう。名もなんぞいふ人 茶へイヤ ちとハ山谷の大
形遠如何 知ヤこまハ女殺連の好男子方 茶へ なんとも殺
あの着サどやうどせんくませんか 茶へ 実ふ如作場 釋ひ異
きもりよ 茶へトキニモリ 山帰庵のお知るる 茶へナニサ見ちら
富士参清サ 知へハテまどやうに行所くり山通行のお参へ

だよ まるら 今一度山中お渡合へ 如何 茶へ 山又山の奇
合ふる 知へハ〳〵 そんど山歩ざ 然ふべ まづ お豆腐の上のも
サト 茶へ家の見世へ這入る 茶へ理茶さん見ハ
衆君連も 徒う 入まるとト 茶を渡ず 鯛ふ年
盃を運び そまるふ 接拶をまる中 客ハ新ふ掛り
形の混雑の 類主の名をよく又 頼面を着ふ
面白い愛白の 新ば 出来やしさ 六花庵の 涼ば
大玄居ら 茶へ ちまハ 行所ふ 掛やしる 茶へハイ

菴と号作ましたのは新堀の北方で私どもの幕窟で
おござりました　美へ然ら然る名ぞ何とも面白い名ざ　如へトキ一
理兵先生ハ山内の仙とも謂つべき仁だがいまだ在
住ぐらしで実家の堕落絶てすこしもあすがね
猿も不御子るぶ不便猿が奥山へ目ぐに這入込で
居猿もあるが楊弓場茶屋をもぢらして見境
内の娘子ども門並堕落させて人種を尽させ
やませんアヽヽヽ売し左猿女に気をのませても飛うま

宗へイヤ大きなる内陀宣が出まさ　理兵へえ何とも挨拶に困りやす
如へモシ理兵衛さんが公意気で一句よくやしさ　条へテます
え何かの秀逸ぞろ早く聞まませう　ハヽヽヽ　如へ外付や
ひとつも出来ぬ娘の子サ　アヽヽヽ　何と秀逸でござります人
ませう　美へとんだ晋子のもぢりでござりまへヽヽ　理兵へそれね
むかし徒有変人の風を誤りとむかしから言通り
何事も情師というものは世間へ作出させずとは深
情を作ることのが猿猴サ道楽すんで大関のなど

和尚奥山に隨喜住すれば　如イヤハヤ大はなし
言を申上るノウ然言へば此方もまづ言のなつて
やはまづ足下の言葉に成て　後へ〳〵行ざる言
風の言葉しゝどのウ此師でも頼まれうあるこでも
なるなぐ　来へまづ好く東西〳〵　如へ須臾住生の
始うと　如へあるこの真ていく鮮鳥の　如へコサ〳〵
然まぎらけくしちやう　後へ何度の所へまア
止くゝ早うゝみなせく　如へ然ウ左様いうまさ

まづ理兵衛がまるる夫婦の猫ゝ大騒ぎで来所の
宅へ上がり込のと人気底で住所を聞さ知ぐまゝく
気霧ゝ寄と見さるめぐくふ　如へ工公　如へ手を言て
関義。エヽ手数で往加減ゝ今釈て猫様を抱様を
言て大宅を生ると教導るひそつか　如へ手〳〵知言
葉の事途ぐ彼女の宅へ行やしさゼト
真顔ゝ多りていく　如へ大方見世を仕舞て帰ゝ
を送ゝ猫ぐ　如へやうまゝ〳〵沈深やの

門口達中ゑ入間〳〵ぜ　奇へも理兵さん大分排徒
却言ゑ成まゝねとトゆゝ処へ出来居ろう　行近さ
名代の多歩蕎麦亀玉屋ゝ十六七のうゝゆゝ〳〵き
振ゆゝ理兵衛の煙を屋号亀敷を食く
振〳〵理兵さん　お帰りゆゝ出ま成まーヨ　理兵ヲイ
却亀屋今ゆゝ性ヨ　振〳〵仮くこちゃ居でおゝへまゝ
ヨト言稽てあどけゆゝ大切ゆゝ踊て理兵
ゆゝ〳〵ゝ言傍らゝ〳〵ゝ遊ゆゝ匂ひ候ひを〳〵

理兵〳〵ヘンあの通り論ゆう　稽古十月の見ろう新十梅
の梅さん訴　好男の本家本元へこゝで行屋ヤ
倦ゝさ行ゝゝ豆へ来でもまくゝ世ゝトこゝゝろう理兵
多郎を大勢にていどゝ好びしゃ黄昏の異ゆゝと
ゝゝび衆人菓子屋を立出て酒井門ゝ美人呆然を
北の方へと歩り けり　性来ハ祥集の富士猪酒肉ハ
あづけき物寄の家ゝ仮の一人住ゝゝゝ酒肉
も浪人の不自由　多き判次第　絵屏ゝ　性所へ

半二良

判二郎が
猿寺の仮
住居

ぬりしも 竹系ぐ 高姿と 情の 実仏よ 張して 見痛く
憂苦苦労さぞう 心を 痛めるぬんと 男人ど 當付人
仏のも 任せぬ 身ぬまとば 塗方ぬく 情の 合力せ 蒸
異ぬうぬ せしど 新文 乳を 付て 傍ま 元ぬう 小巻も 結
て 蒸を 厭ん 出来 さんぐ 金盛 竹系ぐ ぬ番よ 可笑
ひぬ ざるわど 番後をぬうて 安坊ぬん 知ぐけ ぬて
衣類 ぬば ぬぐうぬ ぬぬ せたぬて 実よ おわぬんの
ぬぬ ぬうと 他人も 蒸ぬ心 衣當の 好ぬ 常ぬ 知を

利ぬ ぬば 自然と 好風ぬる 身のとぬら人 元来 女ぬ 好ぬ
風俗 ぬ 地ぬうとて 辺所ぬも 姉姉ぬる 年増ぬ 女ぬ 蒸
揚ぬも 蒸ぬ 水垂ば 新湯の 帰ぬた 寝新の 新類ぬ 不
接拶 ぬぬうて いぬ しぬ 知易ぐて 揚と 情ぬ 到
深ぬも 早ぬ 気ぐぬも 自ぬ 判所 市の 宅ぬ 出入
人 ぬぐ人 いぐぬも 年齢十八九ぬ 二十六七の 婦人と
ぬぬ ぬぬ 判ぬん 今ぬ お新ぬ 服自 新ぬ ぬ ぬ
新ぬ ぬば 昼ぬ ぬぐ 寝ぬ ぬ ちゃ 丈ぬ ぬ ぬ

遠慮ど今のうち気を付るひと用るのうんのと他人のうを
悪く言で自分ハうんざれ人キウ先刻天山の
手刑をうけるうち私うんぞハ宮早昆布門さへお百
度をあげて帰アに百親まるさんの地内でえアく
探んで来るんぶアみ判へナンノ一朝ぶろう世間無に死
たとの所て手孫よ自慢をきるうがひるものうれて
今朝のお百度ハ彼情人のわるハ百度来るをしこのど
うハのも賞ふ見る孫のわ死でもうひハ（ヲヤ煙を

あ言る何手孫ふうて昆布門さへ来るものうれ人
毋人ぶ判へ叱言を言ます孫よ情人と何ん来ろ
てもゆうまく言ひ孫よそして何年富のれを
拾ハて そまぶ宴当ハ 源ハて三百ん当ろてそまで
二個ぶ十分美夜と言ます孫と獲ハてこのぶらう
（ヲヤ）十二手孫る孫ふて孫るこを山頂掛のするもの
ウみ お来さんじゃう ハうまアトいみわくも活家を
抱て風呂ふう帰り来ます 浪表ハうう ヲヤ何ぶ五

和りうち支配宣花をして　▲「ヨヤ今湯よおいでの
ものいるさわ人いう　昨夜ハ何ごみ支じゃア　今ハ人
記らまるひ　苦ご　悔ら〳〵　・「ヤ〳〵うゑ〳〵他人ようし
先へ記さて　出門て手紙をおいるを　言でるひ一年中
和家坊の　舞ホト　言ごふ　判所事の　色を見て　・「判
さん便りが　ひつまりこと　▲「ヨヤ注の使うが〳〵　▲「アレサ
廊ふサ　▲「ゑ人　おやア　まさ　おはさんのもとうと
出門て　悔　ろ六　・「ヨヤ　〳〵　ゑんご他候　ゑごみ

ゑ六人

▲「ヨヤ　〳〵　支ごうて　衆女が　出屋よ　判さんを　義墨
ごつて　上るのふ　情人　ゑもゑ　ゑんで　わ爺　ゑ　廣
耕地の　おはさんゑんぞふ　情人ふゑ　ちゃア　ゑ人よ
合ゑひ　ふ　出来さんい　実正の　内義さんも　同様
だゑ　捨方ごゑひが　他の　女と　情通を　白成ごと　合
点ゑひョ　×「お番ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ
又一個の　郷者　×「判さん　今わ　私の　所へ　来く
ゑ飯を　あゑる　美味　ものごゑ　・「ヨヤ　私の

でまた今わく判さんの好る編つけの豆腐を
母人がうらうらあ茶のお風をあげるところて今
私ら湯ら浮つげよ寒さのごア
菓風を焚て判さんをおぼびでい判さんが今仏様の
坊さんの好ごみ工 ヘ 私も判さんもお菓の山盛
好ごうら母人がうぎ〳〵焚てこのご今仏様さん
ぞと答のとをあ言でうひョ今月はお富士さんごよ
猛記のうるさい ヘ

第十二回

姦と濃さんの人どもうら考き。女同士八月廿一言ふに
花も見物もわまへ子ごみ嬢一人ふ智八
人の主人おわらで判冥帝の櫻屋を同
る姫廊もの達今月もうぶび好ふ雨の雅
同の洋風ごそ櫻工居ス もし〳〵各表様〳〵の方ス
ごもも母のうるの世ゆ相いごもも考らん嬢の冥ふ
お園とりの菓店の娘まご年齢十六七最温今用

俗なるゝ判定の側にあり一中本にて日光上人
判うん此本八面白そうなる上そこなる彫刻ある
草稿らしいがつま本のうつし上ヲヤ繪すも出入てあるヨ 判ハナニ
そこハ既元ゆめ一故漢ゆめりて板行ハ出来るひゝ宮
ふゆ〳〵〳〵著作と本ゝヨ考渡漢で四遍一巻
又ト高ゝ他の狼の稿〳〵ある此一を尊ハ入むして
大方用ゆる中本の上中下と撰ゆ一外題をとゝる序
文と口画不錯会入漢風情ハ人情本の初流ゆて梅

暦と春告鳥なゝ曙紀文句紙りゝ根ゝ
ハヲヤ好題号ゝよ春ゝ乙女雛形。ヲヤ此者の名ハ
例の人〳〵ゆ一遠ゝ極ゝヨ。ヨ判うん此ハ狂歌合ハ
判ハ結ゆさゝゝふ人情本通ゝ往漢ゝの
らゝよ狂歌合ゆ永春魔作。ヲヤ此ハ狂歌ゝとの人
作者の連衆ゝヨ。ヨ判うん 判ハ此ハ名ゝの名永ゝとの人作者の
連中ハ前ゝ師匠ゝ此ゝ也ゝ差別ゝゝ山谷猫の著作の
お洗賀さんの校合ゝ徐下ゝ沢山ありて春水の著

作る所よりハお津賀さんの草稿の方がおもしろいと
いへるすごヨ　その「コヤしを見で中本の中ゆゑ永津賀女と
名が出してあるのさへト言れて背画と本文のみの像ハ女
後に美艶仙女香。ぎやうぎ初ミぐさり。ホンニ仙女香の白粉と
髪垢の落を買ふて業ひへヤト　此のうちもていでなバ　これより本文にかへる　顔色を飾る
ゆて後世見へるし「仇なと散と乃ふも君ふ込みのりかひに
ける花のさかりなれ」と古人も今の世も恋の色よりあらなく
身に思ひおもはれて終はうき身を果るもあればつらぬ悲しひ

辛苦を凌ぎ行末とげて睦まじく楽しむ夫婦も稀なるあり
又恋路の中くに契れハ定の底意も知れ恨と性根も露ハ
見て頼母しき限りなけれど仕合よろしき縁と縁ハあれ
ども変も口情き所あるも添へて恨と因果と儂も僕もままならぬ
身にて親の命令泄や世間の義理に妨られて手振に離
別れ浮名の立事のハ果敢なく悔しき恋ぢゃる月に村雲
花に風春ハあれど変て行衛月影の縁定き路を思ひて
或家の門を窺ふ艶男戸口に寄てまたハ居ぞやくもそれと

あ柿は君様
はり入る
陸子ハ
バテー
玉枝
林一つ柔 英一画

ありうるる掛金の落ちよ三寄人もまた表の男も表ふしてる
表をひらきて戸口寄　清「お夏う」「アイ」清さんえ
お待よトのひつて戸を明ぬ迄ふ明ぬ迄ふ一個の張紙
二八てをのくふ就ぢ寝まらの侍のあぐけまく花の色ぐせ
月の肩雪の膚八白粉もおぶぬ色の色変りの人遣ふ
世の笑凹ハあれど今宵八憂れあづみてや涙の眼元
露けき袂ふ掛ふさ人表れふとふ思ふくれ表ぶ男も
涙ぐる　清「赤係らしぐ実ふ頃ふ多つうくるぜトの辺を

見ぶ　清「安人ハ多「ナニ子今病気裏の表の家へ通歌ふ
往て酒を呑ふて寝て居ると紀紀ハ多ョ「ア寺
戸を叩て謎をうけて出ると亦トそれう亦の上ふ体ふ
多「ア何ふ世ちへう擦くと相伝伝ふぶ酒ふて
うう表ふいふ表ふョ　清「左様言ハまて表と悔ふふと
復の表ふのも公ふ〜とふ仕ふ公ふ世ふ出ふ
変れふい移ふて居るのふ世ふ安人ふ其て表ふ擦ふ
出夏も左様言ふう世辰ハさうとう経別て器ふと出ふの

坐上ふ〻て話じつけるうち此男も男の器くれざうう股
をさすこぶめるあ人うそれざけ主ども未練らしく
外聞悪ひとすりて涙しうぶ心の中ゝやう仕様ざうう
袖ども お茶の行状と見 さて上よ覚悟を仕様と男にて
物をさとうて居ニテ 左様ニテ 私やうそのうハ
おゝも知うあひョ 私やう只ばるお茶ぶ私の所うう 借く
形こ金をうあさあ一件で 毎人と言葉つてお帰うざうう
夫で復を立てお知てあひのごとうう男うて居うけれども

錦う久〻〻達ひうう女をあげこのごとそれふ毎人ぶ
是非他人の愛着ふうまとうふうう左様ちやうお茶の
顔も不立 私も今まで席動だうで通〻このゝ何も
毎人の禁花をまうふあよ金計の欲をうふき変もあひ
うう縁よ依うこぶ おあと相談〻て死んでも仕まうふ
うと男ョト涙を落〻て男の様ニさざうう〻 清ヲヤ
ちんざ立を言ノウ 容易 死んであうあのうふ
記ねがどのうとも 人ハ立 それざま先達中

か経水之用から婦人に隠して医師さんに看せて
貰つたら妊身に違ひないと言つた子が独りでも
平気で家内にやア居られないヨナニ婦人といふものは
些二だつたの金で爺の手箱放して十二の節から今の
婦人の手に着つきましたのだけれども宮早今まで沢山
浮世業で逢つたら今松が家を出ても暮しよくけられる
理ではなくヨ爺が死なずに居ると今まで此家に居やア
ならないのは 清へそれだつても網といふ名があるから是

卑しくも此方がいゝに然て爺さんを頼みなさいましたけれどもなんぞ
亡くなりお婆が死なさるすがなさるけが幼児の節に別れてと
いふ姉さんの行衛は今に些とも知れない所が知れない
ネエサア
松へ それじやア聞出しさがすその姉さんを貰つてく
人が田舎へ引込で後に甚く住合が悪くなつて姉さん
をば女郎衆に売つたサ それから松が種々と人を頼んで
聞合して貰つたらモウ其女郎屋は居なくなつて今
おやア奉公へ身請されて行たといふのだからとてもの

カ、ヤウナヨ　清ハテナ　聞るノウお爺も竹丸も親
丸の縁のある人がアヒうまさうの時よ私細くて行
れ、復変りの兄弟が在のゞけれども死んゞ　他人ゞ
不埋屋を変を言ことのゞ　竹丸まで見捨ものゝ成て
成長ありても音信不通ゞ行るひのヤ　ヨヤ〳〵
お祖母も兄さんゝ姉さんがあるのゝ人　新やナ　ちゞめく
聞ヨ　清ハ左様ゞらう　まゝ　雑るも　ゆゝしゝゞるひ
ゝう夫ゞけれども竹丸の現在立流の家の旦那ゞ

実の兄さんゞ　けゞ　今ゞ　根岸の方へ若旦那をして
住まつることゝのふゝう　尋ても　宜様ゝ　ありまひヨ　ヨ　「それハ
左様ゝ　清さん　お家　ヨア　性根を　きゝて　一ツ　思案をしゝく
お呉なる　新やナ　新して　居るのゞ　あゝゞ　尋でゝ　ゝるひ
よゝト　思ひ　切つゝる　顔色　ゆて　親ふ　出さねど　悔ゝ　泉ゝ
公の底の　推量ゝ　まて　不便　孤児　男の情　清　「子様ゝ
覚悟を　拵て　此土地を　放ま　ゝ　「ア　第一も　二
個ゞ　流ま　ゞ　ゞ　ゞ　死んて　お呉ゝ　ト　言ゝく　涙を

たちまち男も落涙 涙を拭ひ 清
吳服のうち 一て 美色 ちふぐと思ひて お吳服と 戒
和を 拭ひて 意くに 墨うる 絢の 闇 行 とうる 身
雷や 別る 芳 同志 表 ま る 女 の 〜 う ひ け る

狂訓専門入

爲永春曉著

お園 判次郎の傍 て 右 せ 人 本の 表 ま る
腹 修 合 〜 美中の 拭 ひ 引 山家 ひ 集 ひ 〜

六十七

腹達 思 思 〜 て お 園 を 出 〜 ぬ き 流 女 と そ 〜 と 立
帰 う 無 迷 ひ ま る 戯 ま も ま る こ ま 探 べ の 男 例 う べ
か と も ま ひ び 彼 お 園 ハ 本 綾 絡 ひ て 眼 ひ 涙 の 下 引
ま 〜 う ひ ま の こ ま へ ヤ 和 を 無 迷 ひ て 流 女 帰 と の 人
惰 ふ 〜 ひ ま へ 判 ハ 十 二 吳 今 ひ 帰 ま る 拭 ひ 表 を 無 迷 ひ て
帰 ひ こ の ご 表 ハ 然 久 ト 言 ま ご う 涙 の 服 元 そ の 傍 ひ
愛 顧 を ま て 門 口 を 出 る 祈 し も 小 糸 の 内 密 の 用 ど
頼 ま れ て 世 所 ひ 入 帯 ま る 辰 巳 の 茶 八 丁 度 お 園 と 婚 合

けり

此後まこと奏行ごとの続ぶみやもの新題句を
あらんとするぶべ第二編をよろしくうるへくこのく

イヨノクニシマ 春英
尾州一ノ宮 春蝶 校
同 ナゴヤ 春鶯
東都飯台下 春江 合

為永連

春色梅美婦祢巻之六了

揚太真遺傳

處女番

精製桐の箱入
一週 百二十文

もとより此御薬は素人手調と雖ども世の婦人の肌を美しくなるまでと云ふ効能ありて世人の重宝とする所なり肌目細やかなる効能あり色白くなる事世間に多く白粉洗粉化粧水などの油業なるとを製して皆さまのうつくしき肌の美しくなるかたちの美妙の事分の功能色白く仮令ば抵抗なるとも白粉の素材の如くなるまでも美しくなる貴婦人の用ひるとも怨ちの効能は一週り用ひるとも効能は新の

[illegible]

真の美人とゝのふべし

為永春水精刪

愛敬は知恵の光

愛嬌とさる

初みぐさ

出のこゝろの愛を流へぶふ
あらひよりもうつしくるる
こゝろの有　代三十六文

書物所繻子読本所
江戸数寄屋橋御門外弥左衛門町東側中程
文永堂　大嶋屋傳右衛門